

京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター
所報

第12号 2011年6月



Newsletter
of the
Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts

No.12 June 2011

京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター 所報

第12号 2011年6月

ISSN 1346-4590

目 次

研究活動レポート 1	プロジェクト研究・共同研究の報告	1
2	非常勤講師の研究報告	8
公開活動レポート 1	公開講座	17
2	でんおん連続講座	24
3	伝音セミナー	28
専任教員の活動報告		31
彙 報		42
日本伝統音楽研究センター概要		46

Newsletter
of the

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts

No.12 June 2011 ISSN 1346-4590

プロジェクト研究・共同研究の報告
平成22(2010)年度

〈プロジェクト研究A・継続〉

音楽・芸能史における芸術化の諸問題

研究代表者：後藤静夫

共同研究員：石山祥子（鳥根県教育庁文化財課・古代文化センター特認研究員）、今田健太郎（大手前大学他非常勤講師）、上田学（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助手）、奥中康人（愛知県立芸術大学非常勤講師）、川村清志（札幌大学文化学部教授）、笹川慶子（関西大学准教授）、笹原亮二（国立民族学博物館准教授）、澤井万七美（国立沖縄工業高等専門学校准教授）、末松憲子（人と防災未来センター専門員）、竹内有一（本センター准教授）、竹原明理（大阪大学大学院）、龍城千与枝（早稲田大学大学院）、寺田詩麻（共立女子大学非常勤講師）、寺田真由美（神戸大学大学院）、土居郁雄（国立文楽劇場）、廣井榮子（大阪教育大学他非常勤講師）、細田明宏（帝京大学准教授）、真鍋昌賢（北九州市立大学准教授）、横田洋（大阪大学総合学術博物館研究支援推進員）

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センターにおける、2005年度から2007年度の3年間にわたる「近代日本における音楽・芸能の再検討」プロジェクトでは、音楽・芸能にとって「近代」とはいかなる時代であり、音楽・芸能はどのように「近代」に対応してきたかを検討した。

本プロジェクトでは、それらの検討を下敷きとして、音楽・芸能の「芸術化」の諸問題を、消滅し或いは「芸術化」しなかった事例も含め、議論・検討してゆく。

その際、前プロジェクトの視点に加え、音楽・芸能の歴史叙述、関係者の言説、研究史等の再検討も行う。必用に応じて「前近代」の事例も取り上げたい。

（なお、開催場所は特に断らない限り、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室2である）

第1回研究会 2010・05・22（土）

報告書「近代日本における音楽・芸能の再検討」に対する事後検討

第2回研究会 2010・07・24（土）

プレ：寺田真由美「『五段返し』の音楽的成り立ち」

発表：上田学「寄席の初期映画」

第3回研究会 2010・08・29（日）

発表：寺田詩麻（コメンテーター：横田洋）「平山晋吉印のある『桐一葉』の台本について」

発表：細田明宏（コメンテーター：真鍋昌賢）「人形浄瑠璃演者の芸名について」

第4回研究会 2010・09・11（土）

発表：竹原明理（コメンテーター：横田洋）「『人形芸術運動』と生人形」

発表：笹原亮二（コメンテーター：川村清志）「芸能と民俗—出雲市平田の一式飾りを巡って—」

第5回研究会 2010・09・25（土）京都市職員会館 かもがわ

発表：後藤静夫（コメンテーター：土居郁雄）「人形浄瑠璃 大道具成立についての試論」

発表：真鍋昌賢「『大衆演芸』から『大衆芸術』へ—福田定良にとっての客/演者—」

第6回研究会 2010・10・23（土）

発表：寺田真由美（コメンテーター：龍城千与枝）「大津絵節の研究—はやり唄としての大津絵節の旋律型—」

発表：末松憲子（コメンテーター：細田明宏）「歌舞伎『相槌の所作事』の寺社縁起への流入—鎌倉光則寺の開帳と略縁起を中心に—」

第7回研究会 2010・12・05（日）

発表：澤井七美（コメンテーター：真鍋昌賢）「水也田吞州の活動—琵琶講談を中心に—」

発表：横田洋（コメンテーター：今田健太郎）「近代的芸術観と連鎖劇の本領」

第8回研究会 2010・12・18（土）

発表：土居郁雄「画証で追う上方落語の草創期」

発表：石山祥子「黒川能・演目争奪戦の時代」

第9回研究会 2011・01・22（土）

発表：川村清志（コメンテーター：石山祥子）「民俗芸能における対抗と創造 伝統と更新のアイデア V.1.3—五箇山民謡「こきりこ」と明石市大蔵谷獅子舞より—」

発表：今田健太郎（コメンテーター：寺田真由美）「はやしことばの近代」

番外編研究会 2011・02・19（土）

オブザーバー発表：黛友明「上演環境という視座—『門前の春駒』における継続の論理—」

発表：石山祥子「『ヒーロー笛』の誕生と現況について」

〈プロジェクト研究B・継続〉

歌と語りの言葉と“ふし”の研究 ー日本伝統音楽研究の視点と方法ー

研究代表者：藤田隆則

共同研究員：上野正章（大阪大学招聘研究員）、内田順子（国立歴史民俗博物館助教）、遠藤徹（東京学芸大学准教授）、奥中康人（大阪大学招聘研究員）、小塩さとみ（宮城教育大学准教授）、金城厚（沖縄県立芸術大学教授）、久保田敏子、後藤静夫、薦田治子（武蔵野音楽大学教授）、近藤静乃、柴佳世乃（千葉大学教授）、島添貴美子（富山大学講師）、Silvain Guignard（大阪学院大学教授）、田井竜一、竹内有一、Alison Tokita（東京工業大学教授）、丹羽幸江、細川周平（国際日本文化研究センター教授）、森田都紀、山田智恵子

ゲストスピーカー：馬淵卯三郎（大阪教育大学名誉教授）

オブザーバー：今田健太郎、田村菜々子

日本の伝統音楽の諸種目の多くが、歌詞をもった音楽（いわば声楽）であるが、声楽の研究にはあまり焦点が当てられていなかった。この背後には、学問の制度上の問題がある。歌詞の研究者（主に国文学）は、歌詞の内容解釈を優先させるため、形式の研究は当然後回しになる。一方、音楽の研究者（音楽学）も、音楽を自立したシステムとして解釈する営みを中心に置こうとすると、言葉のない音楽を中心にせざるをえない。「音楽」という語が伝統的に器楽をさしてきたことも背景にある。

とはいえ、言葉に「ふし」が生成するメカニズムの研究の大切さが学問上で認識されていないわけではない。今から30年さかのぼる1970年代まで、言葉と歌（speech and song）の境界をめぐる問いは、一般音楽学でも主流の問いのひとつだった。また、日本においても数は少ないものの、同じ関心にもとづいた、言葉のアクセント・拍節研究が行われてきた。こうした先達のまなざしや試みにふれつつ、一般音楽学の問いに立ち戻ることには、日本伝統音楽研究の固有の対象が何かを見定め続けるためにも意味があるはずだ。

このプロジェクト研究は、22年度をもって終了したが、出版物の編集、刊行の作業が残されている。

第1回研究会 2009年6月13日（木）12-16時（新研究棟7階合同研究室）

内容：原稿検討会（出席者）

第2回研究会 2010年8月19日（木）、20日（金）、21日（土）12-16時

（新研究棟7階合同研究室） 内容：原稿検討会（出席者）

第3回研究会 2010年10月9日（土）、10（日）12-16時（新研究棟7階合同研究室）

内容：原稿検討会（出席者）

〈共同研究 C・新規〉

地歌箏曲の楽曲研究

研究代表者：久保田敏子

共同研究員：野川美穂子（東京芸術大学他講師）、井口はる菜（滋賀大学・関西外国語大学他非常勤講師）、伊藤志野（京都當道会所属京都系地歌箏曲実演家）、笠原洋子（当道音楽会所属大阪系地歌箏曲実演家）

目標：箏曲・地歌の楽曲に関する過去の研究会の総括として、収集した諸資料の遺漏調査を行い、その結果を以下のように纏めることを目指した。

1. 古典曲の伝承状況
2. 音および楽譜記録の有無
3. 古典曲の文字資料初出年
4. 流派・芸系による詞章・調弦・演出の異同
5. 同素材に拠る他ジャンルの楽曲との比較

研究会開催：2010年6月5日より2011年2月22日迄、26回に亘り、月3回のペースで研究会を開催。各研究員の調査結果を検討した。

研究報告：以上の研究結果を「資料編」と「楽曲編」に分けて纏め、文字媒体にて発表すべく、既に入稿済。近々上梓の予定である。「資料編」では、地歌箏曲に関する最新の研究成果を踏まえた「総論」と、文字資料、音源資料、現行曲一覧等を掲載し、「楽曲編」では、古典の現行曲全てと、近代の代表作を、「曲名」「曲種」「作詞者」「作曲者」「初出」「調弦」「詞章」「解説」の項目に分けて論述している。

〈共同研究 D・新規〉

歌舞伎の地方じかた ―伝承と演出、歴史と現在―

研究代表者：竹内有一

共同研究員：赤間亮（近世文学、立命館大学教授）、マーク大島（歌舞伎研究、清元節演奏家）、児玉竜一（近世文学、早稲田大学教授）、鈴木英一（近世文学、聖学院大学非常勤講師）、田口章子（近世文学、京都造形芸術大学教授）、武内恵美子（日本音楽史、秋田大学准教授）、土田牧子（日本音楽史、東京芸術大学博士後期課程）、配川美加（日本音楽史、東京芸術大学非常勤講師）、前島美保（日本音楽史、東京芸術大学博士後期課程）

音楽と音がなければ、歌舞伎は幕を明くことができない。歌舞伎における音楽の担い手は、「地方（じかた）」と通称され、単なる演奏家とは異なった、独特の役割や技術を

有する。彼らが果たしてきた役割の歴史の変遷、音楽的意義、演劇・舞踊との関わり方等を考察するために、いくつかの課題を設定して、個人または共同による調査・研究・意見交換・取材・それらの公開を行う。地方やその音楽の将来へ向けた展望も視野に入れ、実演・制作の関係者との提携も重視する。

第1回研究会 2010年6月27日(日) 11:00-19:00

場所：京都南座・レストラン菊水(東山区)ほか

テーマ「地方の役割と音楽—6月京都南座の坂東玉三郎特別舞踊公演をめぐって—」

(1) 公演内容の調査、(2) ミーティング

第2回研究会 2010年11月6日(土) 13:00-20:00、805研究室・合同研究室1ほか

先行研究に関する情報整理と研究計画に関するミーティング

第3回研究会 2010年11月7日(日) 17:00-20:00、合同研究室1ほか

公開講座「京の芸能に見る創造の可能性」を踏まえ、「八島もの」の多様性に関する意見交換

第4回研究会 2010年11月8日(月) 08:00-19:00

場所：永楽館(豊岡市出石町)、御出石神社(豊岡市出石町)ほか

テーマ「関西歌舞伎と地方—永楽館大歌舞伎をめぐって—」

(1) 公演内容の調査、(2) 御出石神社所蔵の祭礼図の調査(ガイド：赤間)、(3) ミーティング

第5回研究会 2010年11月28日(日) 13:00-20:00、805研究室ほか

(1) 上方歌舞伎の歴史と囃子方研究—江戸時代後期を中心に—(武内)

(2) 上方歌舞伎の囃子方研究と史料について—天明以前—(前島)

ゲストコメンテーター：竹内道敬

第6回研究会 2011年3月6日(木)、10:00-20:00、合同研究室2ほか

テーマ「研究の動向と課題」

(1) 共同研究に関わる先行研究と今後の課題(配川・竹内)

(2) 人形浄瑠璃興行における豊後系浄瑠璃・長唄・囃子(ゲスト：澤井万七美)

(3) 宮古路節正本の出版をめぐる版元阿波屋と太夫との関わりについて

(ゲスト：黒川真理恵)

(4) 芝翫画亀寿斎追善摺物について(ゲスト：荻田清)

(5) 歌舞伎義太夫(竹本)研究のために(児玉)

(6) 全体討論(全員)

第7回研究会 2011年3月7日(月) 11:00-18:00

場所：京都南座・レストラン菊水(東山区)ほか

テーマ「地方の役割と音楽 その2」

- (1) 公演内容の調査
- (2) 3月南座講演にみる常磐津と下座の役割—大切浄瑠璃を中心に— (鈴木)
- (3) 邦楽の音環境—邦楽と劇場との関係性 (鈴木)
- (4) 全体討論 (全員)

〈共同研究 E・継続〉

町田佳聲の三味線音楽研究 —三味線音楽の通ジャンルの音楽様式研究に向けて—
研究代表者：山田智恵子

共同研究員：大久保真利子 (大阪芸術大学大学院芸術研究科研究員)、小塩さとみ (宮城教育大学准教授)、蒲生郷昭 (東京文化財研究所名誉研究員、日本大学芸術学部非常勤講師)、龍城千与枝 (早稲田大学大学院)、廣井榮子 (相愛大学他非常勤講師)、久保田敏子、竹内有一 <以下、本年度から新規参加> 寺田真由美 (神戸大学大学院)、田中悠美子 (義太夫協会会員)、吉野雪子 (国立音楽大学非常勤講師)

2009年度共同研究「町田佳聲の三味線音楽研究—三味線音楽の通ジャンルの音楽様式研究に向けて」において行った町田の「三味線声曲における旋律型の研究」の各ジャンル別譜例検証作業を今年度も継続して行った。今年度は、前年積み残した、豊後系浄瑠璃、萩江節・歌舞伎下座、一中節、地歌・箏曲譜例の検討を行った。また、共同研究員による三味線音楽の音楽面についての研究発表を行った。町田の考え方を継承発展させた視点によるものや、町田とは一線を画する独自の視点によるものもあり、三味線音楽研究の新たな展開を示しつつある。次年度は、プロジェクト研究へ発展させ、町田の旋律型研究の検証結果と共同研究員による新たな三味線音楽研究の論考をまとめた形での報告書作成を目指したいと考えている。

今年度を実施した共同研究会および調査活動は以下の通りである。

第1回研究会

2010年5月22日 (土) 合同研究室1

本年度研究会のための準備部会 (新規参加の共同研究員を中心に)

2010年5月23日 (日) 合同研究室1

- (1) 豊後系浄瑠璃譜例の版比較検討結果報告 常磐津節 (龍城千与枝担当)、清元節、富本節 (寺田真由美担当)、新内節、宮蘭節 (山田智恵子担当)
- (2) 研究報告書内容検討

第2回研究会 2010年8月6日 (金) 合同研究室2

- (1) 一中節譜例の版比較検討結果報告 田中悠美子

(2) 研究報告「一中節の旋律型について」田中悠美子

(3) 研究報告「長唄における一中節の借用」小塩さとみ

(4) 荻江・歌舞伎下座譜例の版比較検討結果 大久保真利子

第3回研究会 2010年11月6日(土)、7日(日) 合同研究室2

(1) 地歌・箏曲譜例の版比較検討結果報告 久保田敏子

(2) 研究報告「河東節の曲節について」吉野雪子

(3) 報告「町田解説義太夫節尽しレコードの紹介」山田智恵子

(4) 報告書内容検討

第4回研究会 2011年2月12日(土)、13日(日) 合同研究室2

(1) 機関誌データ入力モデル作成と凡例について 大久保真利子

(2) 長唄譜例の版比較検討結果 <2> 大久保真利子

(3) 長唄の事例に基づく凡例と楽譜の改訂版(修正事項一覧)の作成について 小塩さとみ

(4) 旋律型などについての説明文の文言比較検討 <1> 寺田真由美

(5) 研究報告書案について 山田智恵子

日本民謡協会における町田遺品調査 2011年3月24日、25日

参加者(共同研究員): 山田智恵子、蒲生郷昭、寺田真由美、田中悠美子、吉野雪子、

協力者: 仁尾洋子、時田アリソン、野川美穂子、配川美加

非常勤講師（特別研究員）の研究報告 平成 22（2010）年度

大西秀紀

「義太夫 SP レコードの書誌的調査」

本研究では義太夫節の SP レコードに関して書誌的調査を行い、その発売年月を含むディスコグラフィ（音盤目録）を完成させる事を目的とする。

明治 36（1903）年 1-3 月の英国グラモフォンによる出張録音に始まり、昭和 37（1962）年の生産終了に至るまで、我が国では数万種類の SP レコードが制作・発売された。多種多様なジャンルからなるこれらの録音の多くは貴重な文化的財産であり、学術的研究においても第一級の資料であることは言うまでもない。特に近年芸能研究のみならず、さまざまな分野の研究の切り口やその裏付けに、音声資料や日本のレコード史が取り上げられている。中でも 100 年を越す歴史のある SP レコードは、必然的に注目される機会が多いといえる。しかし日本でこれまでに、いつ、どこで、どのような SP レコードが制作・発売されたかという、極めて基礎的な情報を得るには多くの困難を伴う。その理由はひとえにレコードに関する書誌的情報が整備されてないことにあり、図書の世界には遠く及ばないところである。たとえば大正 5 年に発売された SP レコード全種類に関する情報を示せる人は、日本中を探してもまず見当たらないのではないだろうか。

もちろんこれらの情報が全く整備されていないわけではない。クラシックや流行歌、落語、浪花節、演劇といった限られたジャンルに関しては、それぞれの熱心なコレクターが長きにわたり、実物と紙情報の両面を突き合わせて築き上げた立派なディスコグラフィが存在する。昭和期の戦前に限ればいくつかのレーベルに関しては、ほぼ網羅されたディスコグラフィが作られているとも聞く。しかしそれらはあくまでも個人所有のデータで、一般に公開されているのはごく稀である。また個人の仕事にはどうしても情報収集に限界が付きまとうのも事実である。数年前に「歴史的音盤アーカイブ推進協議会（HiRAC）」が設立され、こういった書誌的データにも調査・公開の動きが出てきたのは大いに評価されるべきところだ。まずビクター、テイチクの総目録が 2010 年に公開され、近い将来コロムビア、キング、ポリドールの総目録の作成・公開へ続くとも聞く。もしこれが実現すればそれは画期的な事で、研究領域でも音声資料の使いやすさが格段に進歩するといえる。ただ明治・大正期のものや、昭和でも中堅・マイナーレーベルに関して調査・公開がされるかということになると、残念ながら悲観的にならざるを得

ない。また本来あってはならない事だが、このようなリストには間違いが付きものなのもまた事実である。せめて作られたリストを Web 上に公開し、定期的に情報を更新することで、より正確な情報を常に提供するようにしていただきたい。

ディスコグラフィを作るには、当然ながらある程度の SP レコードに関する知識が要求される。しかしコレクターが作った物ならば自ずとクリアされている事が、公的所蔵機関で作られる場合には様々な問題が生じている。たとえばレーベル名を入力する際に表記をどうするのか。これは当センターの所蔵資料データベースでも見られたことだが(現在は修正済み)、たとえば戦前のコロムビアの場合「コロムビア」「コロンビア」「日本コロムビア」「Columbia」というように数種類の表記で入力されている場合がある。通称はあってもそれが全国的に統一された名称ではないため、現在どのような表記を使っても一応は自由だが、一つのデータベース内で表記が統一されていないのは大いに問題がある。データベースの作り方にもよるが、この場合所蔵盤のなかからコロムビアレーベルのものを絞り込もうとすると、同じレーベルであるにも関わらず、「コロンビア」「日本コロムビア」「Columbia」と入力されているものは検索にかからないという結果になる。また現在公開されている所蔵機関のディスコグラフィで、出張録音盤の米ビクターや米コロムビアと昭和のビクター、コロムビアを混同しているものざらである。これらはデータベースの責任者が意思統一する考えもなく入力担当者に仕事を任せ、さらに入力担当者が何回も代替わりした結果によるものである。

またナショナル、オリエント、ヒコーキ等の正規盤と複写盤を区別している例もまず見ない。それどころか、一目で複写盤と分かるものでも、何の注釈もなしに正規盤と同じ扱いで掲載されている場合がほとんどである。レコードに著作権が認められていなかった明治・大正初期には、多くの複写盤(海賊盤)というコピー商品が横行した。吉田奈良丸、京山小円、吉原メ治、豊竹呂昇、桃中軒雲右衛門といった当時の人気者のレコードの、同じ内容の盤が何種類も存在するのはそのためで、正規に発売されたものに絞り込めば、その種類は何分の一かになる。彼らの人気を知る尺度として、これらの複写盤をディスコグラフィに掲載する事にそれなりの意味はあると考えられるが、その場合正規盤か複写盤か、さらに複写盤ならば初出は何なのか、初出が不明の場合はその旨を当然触れておくべきであろう。あらたにディスコグラフィを作る場合、各所蔵機関発行のディスコグラフィは重要な情報源となる。後世に正しい情報を残すためにも、既存の情報の真贋を見極める眼が必要である。

さまざまな音曲のジャンルから、本研究の対象を義太夫節とした理由は次の通りである。

- ・国文学、音楽学、芸能史と多方面の研究対象となっている。
- ・SP レコードの歴史において、どの時期にも発売されており、かつ枚数が多い。
- ・国立文楽劇場編『国立文楽劇場蔵 義太夫節 SP レコード目録』を編集した経験と、架

蔵資料を含み近いジャンルである。

以上の観点からスタートしたが、今年度は情報収集に終始した感がある。情報収集の継続は当然のことだが、来年度は一応の形を整えられるようにしたい。また同時に他ジャンルの情報も出来る限り収集し、雅楽、謡曲、三味線音楽全般等の SP レコード・デイスコグラフィ作成への今後の足掛かりとしたい。

◇関連する口頭発表

- * 2010年12月12日「ニッポノホンの六代目菊五郎レコード」、歌舞伎学会秋季大会、日本女子大学
- * 2011年2月27日「大正-昭和初期のSPレコードから」、大阪芸能懇話会、難波市民学習センター

◇関連する講座

- * 2010年5月6日「SPレコードの作り方」、第1回伝音セミナー、日本伝統音楽研究センター
- * 2010年6月3日「レーベルいろいろ」、第2回伝音セミナー、日本伝統音楽研究センター
- * 2010年8月29日「聴く歌舞伎の楽しみ—レコードに残る名優のセリフ—」、よみうり歌舞伎講座シリーズ 歌舞伎への扉 5 歌舞伎の世界編、梅田よみうり文化センター
- * 2010年12月2日「長時間レコードについて」、第6回伝音セミナー（山田智恵子「山城少椽の長時間レコードを聴く」）、日本伝統音楽研究センター
- * 2011年3月3日「花街をどりのレコード」、第8回伝音セミナー、日本伝統音楽研究センター

◇関連する講演

- * 2010年12月10日「武智鉄二と演劇映像専修室蔵「武智コレクション」をめぐる」第8回芸能の音声・映像資料についての研究会、早稲田大学演劇博物館グローバルCOE日本演劇研究コース、早稲田大学文学部
- * 2011年3月29日 竹本三輪大夫、吉田箕二郎、大西秀紀「国立の劇場が大阪で果たす役割〜国立文楽劇場の現場から」、舞台芸術ゼミナール、NPO 法人大阪現代舞台芸術協会、スタジオ 315

◇関連する展示

- * 2010年7月1日～ 「SPレコードレーベルに見る 日蓄-日本コロムビアの歴史」、日本伝統音楽研究センター

◇関連する執筆（単著）

- * 大西秀紀編「SPレコードレーベルに見る 日蓄-日本コロムビアの歴史」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2011年3月31日

◇関連する執筆（報告書・共著）

- * 文部科学省グローバルCOEプログラム「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ」
拠点（立命館大学）上方芸能研究会（2007年度～2010年度）報告書
上方芸能研究会編『権藤芳一 上方芸能を語る ―能楽・文楽・歌舞伎、そして武智鉄
二一』、立命館大学アート・リサーチセンター、2011年3月

齋藤 桂

「日本における民俗音楽研究と創作の関係についての実証的研究」

上記の研究課題は、私がこれまで続けてきた近代日本の新民謡というジャンルを担う重要な一部に、民俗音楽研究（者）が含まれていることに気づいたことで導かれたものである。今年度はそれに関連して

- ①新民謡がつけられたコンテクスト、
- ②新民謡についての作曲・作詩論、
- ③初期の民俗音楽学者の活動、

の三つについて本センターを含む各図書館・資料館において調査研究を進め、特にアウトプットを行ったのは①と②の二つである。

まず、2010年5月に慶応義塾大学日吉キャンパスにおいて開かれた国際フォーラム「International Forum for Young Musicologists 2010」にて、「The New Folk Songs in Modern Japan」という題で、新民謡というジャンルの内部において、国民と民族、都市と田舎、西洋音楽と日本伝統音楽、という要素の間でいくつかのコンフリクトが含まれていることを指摘する発表を行った。特に研究対象を限定しない国際フォーラムという性質上、研究対象について細かい情報交換を行うというよりも、大きな問題設定の仕方や、研究の枠組・進め方などについての議論が主となったが、他国においても新民謡と類似の文化現象が生じていることを確認し、その捉え方について意見交換を行った。

また、2010年11月には人間文化研究機構国文学研究資料館にて開かれた国際集会「第34回国際日本文学研究集会」「オルタナティブな媒体としての同人雑誌——昭和初期の新民謡雑誌について」の題でポスター発表を行った。ここでは、これまでの新民謡史がおもに音楽史として語られてきたことを指摘し、一方で文化的なりテラシーの違いや音声メディア普及の程度の違いなどから、昭和初期の地方都市では「文学としての」新民謡が発信・受容されていたことを述べた。

さらに本稿執筆時からは先の話であるが、2011年3月にはチェコ共和国のカレル大学にて開かれる国際ワークショップ「International Workshop OSAKA-PRAHA 2011: Between "National" and "Regional"; Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures」

において“Between “Tradition” and “Modernity” : Nakayama Shimpei's Conception of Musical Scales” の題で発表を行う予定である。ここでは作曲家である中山晋平の音階論を取り上げ、それが近代の民謡を重視する考えと近世の「俗」の概念とをどのように消化し、また同時代の洋楽論との整合性を如何に保ってきたか／保ってこなかったかについて述べる。特に、長調と短調の差を徳育思想へと変換した明治以降の日本の洋楽受容の傾向と、近世以前の「俗」な音楽でさえもポピュラーなレベルでは尊重すべき「伝統」として捉えられた近代の状況との関係から、新民謡がその二者を両立させるという矛盾に取り組んだ（そしておそらく止揚しきれなかった）ジャンルであることを示す予定である。

本センター内での活動としては、2010年10月6日から五週にわたって、全五回の「でんおん連続講座」において「新民謡の世界——「新しさ」とは？「民謡」とは？」という題で講座を行った。この講座では、明治以降「民謡」が重視されるようになった経緯から、それを受けた新民謡の流行、また現代の世界各国での類似の文化現象までを扱い、今日では流行歌の一ジャンルとしか認識されていないであろう新民謡というジャンルの諸相を明らかにした。

また「伝音セミナー」では、2011年1月6日に「民謡・新民謡の録音を聴く」と題して、本センター所蔵のSPの中から、大正から昭和初期にかけての録音を、解説を加えつつ聴き、民謡・新民謡が当時どのような意義をもって発信・受容されたかを述べた。

さらに、新民謡作曲家が作曲手法に取り入れなかったであろう、詩人による「朗読」という詩の音声化の問題を扱った論文を執筆した。この論文は「北原白秋の朗読から考える近代詩の「ふし」」の題で、本センターが主催しているプロジェクト研究「歌と語りの言葉と”ふし”の研究——日本伝統音楽研究の視点と方法」の報告書に掲載予定である。この論文では、近代の日本の洋楽が定型詩を、偶数拍子系リズムか話し言葉か、という二者択一の問題として扱っていたのに対し、詩の朗読ではまた別の論理が働いていることを明らかにするものである。

◇今年度の活動

- * 2010.05.14 報告書 "The New Folk Songs in Modern Japan" International Forum for Young Musicologists 2010 pp.105-110, The Musicological Society of Japan
- * 2010.05.14-17 口頭発表 "The New Folk Songs in Modern Japan" International Forum for Young Musicologists 2010, 慶應大学日吉キャンパス
- * 2010.06.25 楽曲解説「久保陽子&弘中孝デュオ・コンサート」、アピカホール
- * 2010.09.12 楽曲解説「西脇市制5周年記念 第111回しばざくらコンサート 県民芸術劇場 ヴァイオリンの名花・千住真理子を迎えて」、アピカホール
- * 2010.10.06-11.10 (全5回) 市民講座「でんおん連続講座:新民謡の世界——「新しさ」とは？「民謡」とは？」、日本伝統音楽研究センター

- * 2010.11.28-29 ポスター発表「オルタナティブな媒体としての同人雑誌——昭和初期の新民謡雑誌について」第34回国際日本文学研究集会、人間文化研究機構国文学研究資料館
- * 2010.12.18 口頭発表「近代日本における新民謡の成立——音楽・詩・活動のあり方からの考察」日本音楽学会関西支部第350回例会、京都市立芸術大学
- * 2011.01.06 講演「伝音セミナー：民謡・新民謡の録音を聴く」、日本伝統音楽研究センター
- * 2011.03.05 楽曲解説「コー・ガブリエル・カメダ日本公演」、サントリーホール・ブルーローズ
- * 2011.03.21-22 口頭発表“Between “Tradition” and “Modernity” : Nakayama Shimpei's Conception of Musical Scales” International Workshop OSAKA-PRAHA 2011: Between “National” and “Regional” ; Reorientation of Studies on Japanese and Central European Cultures, Univerzita Karlova v Praze

田鍬智志

「舞楽（雅楽）における旋律様式変遷に関する研究 —地方に伝承される舞楽との関連から—」

かつて、イギリスの音楽学者（故）ピッケンは、現行雅楽の音進行の中に大陸的・民謡的旋律が潜んでいることを発見し、それを（隠された）基本旋律とよんだ。その発見から、はや半世紀以上の歳月が経過している。彼は、基本旋律そのものが大陸から将来した雅楽であり、中古・中世を通じて認識されていた雅楽の旋律であるとして、その後長年にわたって平安鎌倉期の古楽譜の解説をおこなった。

かれの研究をうけて、私は予てより、地方舞楽—それらは、こんにちの中央舞楽（雅楽）とは著しく芸態・旋律の異なる芸能—の旋律（笛旋律）が、かつての中央雅楽における“基本旋律”の片鱗ではないか、という憶測を抱いてはいた。しかしそれを検証してみるには至らず徒に歳月が過ぎてしまった。そうしたところ、ふとしたことから、静岡県森町に伝承される十二段舞楽の大方の各演目の笛旋律が、中央舞楽における当該曲の基本旋律に近似していることに気がついたのである。

しかし、数ある地方舞楽を一瞥したところでは、現行中央の笛旋律らしくないのは一聴瞭然とはいえ、フレーズいえるような小規模の旋律をただ繰り返している例や演目に関係なく同じ旋律を共通で用いている例も少なからずあり、十二段舞楽のように当該曲の基本旋律ほぼそのもの、というわけでもなさそうなのである。そのため、こうした事例に対しては、曲名にはこだわらず、フレーズ単位での基本旋律との関連性を検証する

必要を感じていた。

*

ところで、雅楽の譜（殊に本研究で扱う箏譜）は、瞥見すれば現行譜も中世以前の古譜も大略同じに見えるが、ところが実際は、一部の曲譜においては譜字数に相違があり、また古譜にはある左手でピッチを変える推手・曳手の指示が現行譜にはない、など少なからず異同がある。したがって、抽出される基本旋律も現行譜と古譜とは異なる。そこで本研究では、平安末期の藤原師長（1138～1192）が著した箏譜集成『仁智要録』に基づいて研究を進めることにした。そして先ず、基本旋律を自分なりに把握するために、（無謀にも）同譜記載の楽曲（約200曲）を網羅的に弾きこなしてみようことを思い立った次第である。

国内での、ピッケン学説に基づく『仁智要録』解釈演奏の先例は、皆無に等しく、当然乍らその音楽を知っている人も皆無に等しい。したがって、誰に教えてもらえるわけでもなく独習に頼るほかない。加えて、仁智譜には、左手の技法も駆使されているので（ピッケン学説的に弾こうとおもうと）それ相応のヴィルトゥオーソ的技巧を要する。そのため仁智譜は、いまだ手をつける人がいない未知の領域なのである。私は、その未開拓の地平に無謀にも踏み入ってしまったわけであるが、さしあたって、今年度はごく限られた曲をじっくり丹念に弾きこなすのではなく、なるだけ多くの曲譜をさらって、古代中世の音楽世界の全体像を具現化することに心を砕いた。そして早速、その努力の一端は、でんおん連続講座E「古代中世の雅楽～院政期の箏譜『仁智要録』を弾く・聴く～」で披露させていただいた。この講座では、主要な唐楽曲に加えて、これまでの古代中世雅楽の音楽的研究では、ほとんど取り上げられることのなかった高麗楽も数多くの曲を取り上げ、受講者にお聴かせすることができた。

こうした仁智譜記載楽曲を網羅的に弾く試みは、あくまで地方舞楽の笛旋律の歴史的検証のためと、ピッケン論説に基づく未知の雅楽の調べを広く一般に知ってもらうことを趣旨としているのだが、古代中世における箏の様々な問題に関して、それらの解明の端緒をイモヅル式に掴むことができ、思わぬ収穫があった。そのため今年度は、本来の研究テーマからかなり脱線して、それらの派生的研究に時間を費やすことになった。

**

現行雅楽において箏は舞楽には加わらない。しかし中古中世においては舞楽にも加わって演奏していたことは既に知られているところである。しかし、現行では舞に絃楽器が加わらないこともあってだろうか、舞あるいは舞楽会との関連において仁智譜を研究した先例は皆無に等しい。私は、仁智のあらゆる調の、あらゆる曲をつまみ食的に弾いているうちに、「仁智要録は舞楽での演奏を想定している楽譜」ではないかと考えるようになった。それに関わる問題の一つが仁智譜巻第一に記されているところの、現行とは異なる調絃法である。現行調絃は、各調の楽曲が他の楽器に対してほぼユニゾン（オ

クターブ)で動くよう設定された調絃であるが、仁智の調絃は、平調と太食調の調絃を除いて(楽譜通りに弾けば)他の楽器とユニゾンとならない。盤渉調調絃を例に言えば、(楽譜通りに弾けば)他の楽器の旋律に対して、完全4度上に並行で動く恰好になる。この不可解な調絃法に対して、先行研究はみな一様に楽理的理解を試みようとして、そして事実上暗礁に乗り上げた恰好になっている。調絃の問題は、一見すると舞楽とは何ら関わりのないように思われるのだが、私はこの問題を解く鍵こそ「舞楽会」ではないかと考えている。舞楽会という現場、それは様々な調の曲をたてつづけに演奏しなければならない状況であり、弾箏者には迅速な調絃の変更が求められる場である(一部を除く左方舞一唐楽一では、舞人登台楽(調子)中に調絃を変更していた)。私は、演目ごとに13の琴柱全てを一々変更するのではなく最低限数の琴柱を動かすだけで済ます方法—楽理的理由(のみ)ではなく現場主義的な調絃法—それが仁智の調絃法ではないかと現時点では考えている。講座では試みに、左右ツガイの曲目は連続して演奏してみたが、確かに、部分的な変更で済む仁智調絃法は舞楽会では便利であることを実感した。しかしそうだとすると、他の楽器とユニゾン進行しない点が問題として浮上する。私は、これも実験までに、受講者には何も伝えず、仁智譜の箏と二十二冊楽書笛譜(推定、平安末~鎌倉期頃)の笛との合奏で、盤渉調(越殿楽)を演奏してみた。演奏後、受講者に箏と笛の旋律の関係で気になる点はないか、と尋ねたが、箏と笛が4度並行で動いていることに気付いた方は皆無であった。非常に興味深い実験結果である。勿論練習次第ではユニゾンになるように絃をずらして弾くことも、そう難儀なことではない。現時点では、双方の可能性を探っている。

今年度は、こんにちの地方舞楽笛旋律と、仁智の旋律との関係を探ることが予定の研究であったが、以上述べたように仁智譜を弾くには、調絃やリズムの解釈など、様々な謎の解決を並行せねばならず、結果かなり脱線して、それらの問題の考察と演奏技術の練磨にほぼ一年間を費やすこととなった。

演奏技術については、いまだ人前で披露できるようなレベルではないが、「多少下手でも、なるべく多くの曲目をこなす・聴いていただく」ことを目標に励んだ。連続講座では、唐楽・高麗曲あわせて10数曲を披露させていただいたし、また奇遇にもNHK京都と日本テレビの番組に出演させていただく機会を得て、(私の拙い)仁智の演奏を公共電波に乗せていただいた。多少なりとも“平安期雅楽のPOPな世界”を不特定多数の方々に知ってもらうことができたのではないかと自負している。これは一重に、講座受講者の方々と両テレビ局番組担当者様のご理解ご最厚あつてのことである。この紙面を借りて御礼申し上げる。加えて、当センター資料室学芸員の齋藤尚氏には、現行の龍笛吹奏技術とは著しく異なる“研究解釈吹き”を、業務後の貴重な時間を割いて練習いただき、演奏に加わっていただいた。重ねて御礼申しあげたい。

◇おもな活動

- * 2010年11月17日～12月15日、市民講座「でんおん連続講座：古代中世の雅楽～院政期の箏譜『仁智要録』を弾く・聴く～」(全5回)、日本伝統音楽研究センター。
- * 2010年12月21日、NHK京都放送、『ニュース610京いちにち』(ラブ☆ラボ研究室探訪—解明!平安貴族の愛した箏の調べとは?—)出演。演奏曲目:〈想夫恋〉〈打球楽〉—『仁智要録』所収譜の解釈演奏—。
- * 2011年2月20日、日本テレビ放送『心の都へ—スペシャル—美しき古都…千年の旅人 第7回“憧”篇』(平等院鳳凰堂の雲中供養菩薩が奏でる音楽)出演。演奏曲目:〈越天楽〉—現行譜を使った現行演奏とピッケン学説に大旨基づく演奏—、〈菩薩破〉—『仁智要録』『古譜鳳笙譜呂卷』所収譜の解釈演奏—。

平成22年度第1回(通算第28回)

山口鷺流狂言—地域伝承の可能性—

構成・司会：藤田隆則

日時：平成22年6月26日(土) 午後2時から午後5時

会場：大江能楽堂(京都市中京区押小路東入る)

受講料：1,000円 定員：300名 後援：山口県教育委員会

主催：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、能楽学会

内容：(1) 狂言三番(柿山伏・千鳥・鬼瓦)の上演 山口鷺流狂言保存会

(2) 講演「山口鷺流の歴史と特色」稲田秀雄(山口県立大学教授)

(3) トーク「見る側から、演じる側から」米本太郎(山口鷺流狂言保存会)、川島朋子(京都女子大学短期大学部准教授)、長田あかね(京都造形芸術大学非常勤講師)、藤田隆則(本学准教授)





趣旨：山口県に伝承される鷲流狂言について、歴史や他狂言の流派との芸態のちがいを明らかにしつつ、狂言三番（柿山伏・千鳥・鬼瓦）を鑑賞する。また、地域文化と学術機関との連携の在り方についても学ぶ。

報告：

雨であったにもかかわらず、200人程度の参加者があった。狂言研究の第一人者である稲田秀雄氏による、明快で要をえた講演、米本太郎氏、川島朋子氏、長田あかね氏による短いスピーチと藤田をまじえた4人のトーク、それらを挟みこむかたちで、柿山伏、千鳥、鬼瓦という3番の狂言が上演された。

京都の観客は、茂山家を中心とする大蔵流の狂言を目にすることがおおく、狂言ファンは、日頃見慣れているレパートリーの要所要所にめずらしい動きや型がちりばめられていることに、新たな発見と驚きを与えることとなったであろう。終了後の声として多く聞かれたのは「鷲流の芸は上品である」という感想である。考えるに、これは、一地方においてささやかに、しかし、力づよく伝承がおこなわれてきたという、持続的努力のみの生み出しうる業なのではないだろうか。

当日の公演の様子は、山口放送（KRY）が、保存会の長老小林栄治氏に焦点をあてた、約15分程度のドキュメンタリー番組として、放送された。また、当日の公演の様子は、DVDを制作し、当日に配布した解説パンフレットと合わせて、発売する予定である。

平成22年度第2回（通算第29回）

京の芸能に見る創造の可能性—見え隠れする本歌取りの精神—

構成：久保田敏子・後藤静夫・田井竜一・
竹内有一・藤田隆則・山田智恵子

日時：平成22年11月7日（日）午後1時30分から午後4時30分

会場：京都市立芸術大学 講堂 入場料：3,000円

協力：（財）片山家能楽・京舞保存財団、京都舞台 協賛：真如苑社会貢献基金

趣旨：芸能が持つ多様性、分野ごとの独自性、分野を超えた共通性について、パネリストによる提示事例を踏まえ、芸能的展開の好例である「八島もの」の実演を鑑賞し、本歌取りの精神によって生み出された、創造の可能性について考える。（京都市立芸術大学創立130周年記念・日本伝統音楽研究センター開設10周年記念のメイン事業として開催。）

内容：

- 第1部 シンポジウム「京の芸能に見る創造の可能性—見え隠れする本歌取りの精神」
〈パネリスト〉小野恭靖（日本歌謡史、大阪教育大学教授）、冷泉為人（日本美術史、財団法人冷泉家時雨亭文庫理事長）、岡田万里子（演劇学）、久保田敏子（日本音楽史）、藤田隆則（民族音楽学）
〈司会〉後藤静夫
〈おもな話題〉本日の趣旨、「本歌取り」の視点、〈本歌取り〉と〈見立て〉、近世邦楽に生かされた「本歌取り」の精神、平家琵琶から能の〈八島〉へ、京舞における「本歌取り」



○第2部 実演と解説 —「八島」の系譜— 解説：岡田万里子



1. 観世流 仕舞「屋島」
片山 清司
(地謡) 大江信行、
宮本茂樹、
大江泰正、
大江広祐

2. 琵琶における「八島」の世界
須田 誠舟



3. 京舞 地歌「八島」
井上 八千代
(歌・三弦) 菊原光治
(箏) 菊萌文子



平成22年度第3回（通算第30回）

京観世の伝統 ―記録と記憶から聞こえるもの―

構成・司会：藤田隆則

日時：2011年2月5日（土）～13日（日）

会場：京都市立芸術大学堀川御池ギャラリー

料金：500円（11日のみ2000円） 定員：各回50名

趣旨：「京観世」（京都の観世流の謡）は東京の観世流と大きな違いがあることが知られていました。残念ながら、交通機関や録音技術の発達、伝承についての考え方の変化などにより、京観世の独特な謡いぶりは失われてしまいましたが、記録はある程度残されており、伝承の正しさを検証する作業も進められつつあります。この講座では、研究者、実演家を講師として招きつつ、書かれた記録と担い手の記憶から、かつての京観世の謡いぶりの実態にせまり、京都らしい謡の姿を明らかにします。（広報資料より）

内容：

- * 2月5日（土）14時～16時 講演「京観世の歴史」
講師：大谷節子（神戸女子大学教授、国文学・芸能史）
- * 2月6日（日）14時～16時 講演「歴史的変遷の中の京観世」
講師：高桑いづみ（東京文化財研究所無形文化遺産部室長、日本音楽史）
（2月7日（月）は休館日）
- * 2月8日（火）14時～16時 ワークショップ「京観世の録音をきく（その1）」
進行役：藤田隆則（本学准教授、民族音楽学）
- * 2月9日（水）14時～16時 ワークショップ「京観世の録音をきく（その2）」
進行役：藤田隆則（本学准教授、民族音楽学）
- * 2月10日（木）14時～16時 講演「京観世林家を含む京都の謡いぶり」



講師：味方健（観世流能楽師）〈写真〉

* 2月11日（金）14時～17時 講演と実演「京観世の伝統」

(1) 講演「昭和50年代の京観世」

講師：羽田昶（武蔵野大学客員教授、能・狂言研究）

(2) 講演「記録と記憶のなかの京都の謡」

講師：五島邦治（京都造形芸術大学客員教授、日本歴史学）

(3) 素謡の実演：井上裕久（観世流能楽師）、吉浪壽晃（観世流能楽師）〈写真〉



(4) 展覧「京観世の伝統—記録と記憶から聞こえるもの」

期間：2月5日（土）～2月13日（日）



報告：

2010年度より運用がはじまった、堀川御池ギャラリーでの公開講座であった。そもその提案は、一週間にわたって何か展示を、ということであったので、公開講座をかねておこなうやり方を模索してみた。最終的には、連続講座と公開講座と展観とを組み合わせるかたちが選ばれた。

連日の公開講座には、現在もお謡をたしなんでおられる市民の方々、関西在住の方々が集まられた、また東京からの参加もあった。ほぼ毎日、定員にたっする数の参加者があった。

もとより、すでに絶滅したといってもよい謡の伝統である。記録（紙と録音）と記憶から、かつての京都の謡の姿を明らかにするというやり方から描くことができる世界には、おのずと限界がそなわっている。録音も悪いし、技法もいまや完全な再現は不可能なのである。

それでも、一週間の連続講座は熱気をおびたなかで無事終了した。それは、京都においては、京観世という京都独特の謡をなんとかより詳しく知り、また大切に伝えて行きたいとする情熱が、まだまだ強く息づいているということによる。

約半世紀前までに絶滅においこまれた京観世に、あついまなざしがそそがれた一週間は、私にはまるで「隠れキリシタン」集会のように思われた。少なくとも企画者にとっては、さらなる研究への情熱をかきたてられる、熱気にみちた催しであった。



でんおん連続講座

平成 22 (2010) 年度

平成 22 年度でんおん連続講座 A

丸本でよむ義太夫節 一菅原伝授手習鑑・三段目桜丸切腹一

講師：後藤静夫

4月21日	文楽と義太夫節	30日	丸本を読む5
28日	義太夫節の構造と丸本	7月14日	「桜丸切腹の段」を見る
5月12日	「菅原伝授手習鑑」とは	21日	まとめ
19日	丸本を読む1	全10回、13時から14時30分	
26日	丸本を読む2	会場：合同研究室1	
6月9日	丸本を読む3	受講料：5000円	
23日	丸本を読む4		

趣旨 (チラシより)：人形浄瑠璃文楽で演奏される「義太夫節」は、劇場音楽としてすばらしい表現力を有し、現代の鑑賞者を感動させてくれます。その感動は、台本である浄瑠璃作品が優れていることが前提となっています。「義太夫節」の台本は「丸本」と呼ばれ、読みものとしても広く流通・享受されてまいりました。木版刷りの丸本は一見難しそうですが、少し慣れれば案外と読みやすいものです。スケールの大きな、しっかりとしたストーリーが独特で洗練された文体で表された作品は、読み進んでいくと引き込まれ、次の展開を知りたくなっていく楽しみが味わえると思います。さらに、文楽や義太夫節の概略や構造を学んだ上で、菅原道真を巡る庶民の親子・夫婦・兄弟の愛情を格調高く描く「菅原伝授手習鑑・三段目桜丸切腹の段」を原文で読んでみましょう。また、活字翻刻を参照しながら変体仮名の読み方も学んでみましょう。

平成 22 年度でんおん連続講座 B

謡を朗読する 一能をたのしく鑑賞するための準備一

講師：藤田隆則

5月12日	はじめに一もっとも重要なのは謡の文句である一	6月2日	「詞」から「さし声」へ (吟誦から朗誦へ)
19日	人物は囃されて登場する	9日	「拍子不合」と「拍子合」の歌の交替
26日	人物の「名のり」、曲の「次第」	16日	「問答」「物語」から仕方話

	へとうつるシテ	14日	おわりに一物語の結末と祝言一
23日	シテは立ち上がる一シテの「歩行」と「仕舞」と一		全10回、10時40分から12時10分
30日	シテは方角と景物を指し示す一能の主役は場所である		会場：合同研究室1 受講料：5000円
7月7日	シテが働く・シテが舞う		

趣旨：室町時代に成立した能は、現在でもよく演じられていますが、1時間以上の長さの力のこもった演技をよりよく受け止めるためには、鑑賞のポイントをしっかり意識しておくことも大切です。この講座では、毎回1番の能の音楽演出上のポイントを開設した後、能の基本である「謡（うたい）」のテキストをみなで朗読します。鑑賞暦は長くても、なかなかわかった気にならないと感じておられる方、日本を代表する文化の一つをより身近に感じたいと思っておられる方、ぜひ受講してください。なお、本講座で取り上げる曲目は連続講座Cとは異なります。

平成22年度でんおん連続講座C

謡を朗読する 一能をたのしく鑑賞するための準備一

講師：藤田隆則

10月6日	はじめに一もっとも重要なのは謡の文句である一		の「歩行」と「仕舞」と一
13日	人物は囃されて登場する	12月1日	シテは方角と景物を指し示す一能の主役は場所である一
20日	人物の「名のり」、曲の「次第」		
27日	「詞」から「さし声」へ（吟誦から朗誦へ）	8日	シテが働く・シテが舞う
11月10日	「拍子不合」と「拍子合」の歌の交替	15日	おわりに一物語の結末と祝言一
17日	「問答」「物語」から仕方話へとうつるシテ		全10回、10時40分から12時10分 会場：合同研究室1 受講料：5000円
24日	シテは立ち上がる一シテ		

趣旨：室町時代に成立した能は、現在でもよく演じられていますが、1時間以上の長さの力のこもった演技をよりよく受け止めるためには、鑑賞のポイントをしっかり意識しておくことも大切です。この講座では、毎回1番の能の音楽演出上のポイントを解説した後、能の基本である「謡（うたい）」のテキストをみなで朗読します。鑑賞暦は長くても、なかなかわかった気にならないと感じておられる方、日本を代表する文

化の一つをより身近に感じたいと思っておられる方、ぜひ受講してください。なお、前期と曲目を差し替えて進めます。

平成 22 年度でんおん連続講座 D

新民謡の世界 — 『新しさ』とは？『民謡』とは？—

講師：齋藤 桂

10月6日	はじめに—新民謡の誕生 まで	11月10日	まとめ—世界の新民謡— 全5回、13時から14時30分
13日	文学としての新民謡	会場：合同研究室1	
20日	音楽としての新民謡	受講料：3000円	
27日	様々な新民謡運動		

趣旨：大正から昭和にかけて「新民謡」と呼ばれるジャンルの音楽が非常に流行しました。今日《ちゃっきり節》や《東京音頭》といった楽曲をその代表として思い浮かべる方も多いと思います。しかし近代日本の音楽史・文学史をみると、流行歌・芸術歌曲・詩など、あまりにもたくさんのが新民謡と呼ばれており、統一した定義を与えるのが不可能とすら思えます。そのため、改めて新民謡とはどんなジャンルだったのか、と考えてみると、なかなかこたえるのが難しいものでもあります。しかしその雑多な状態は、当時の人々が「新しさ」とは何だろうか、「民謡」とは何だろうか、という問題に頭を悩ませて、様々に答えを出した結果であるともいえるでしょう。

平成 22 年度でんおん連続講座 E

古代中世の雅楽 — 院政期の箏譜『仁智要録』を弾く・聴く—

講師：田鍬智志

11月17日	こんにちの雅楽	—舞楽曲篇1—
24日	笙・箏・琵琶各譜にみる“基本旋律”の話	15日 『仁智要録』を弾く・聴く —舞楽曲篇2—
12月1日	『仁智要録』にみる箏の調 弦・奏法	全5回、13時から14時30分 会場：合同研究室1
8日	『仁智要録』を弾く・聴く	受講料：3000円

趣旨：こんにちの雅楽では、旋律を担う箏・笛（龍笛と高麗笛）に対して、笙・箏・琵琶は、一つ一つの音（和音）を長く延ばす、あるいは散発的に掻き鳴らすなど、伴奏の役割を担っているといえます。ところが、古代中世の物語や日記などには、箏や琵琶のみで演奏する場面がたくさん出てきます。“伴奏”のみを弾いて・聴いて楽しむ、そのような慣習が本当にあったのでしょうか。—笙・箏・琵琶の譜を、相当時間を凝縮して演奏してみると、大陸的な歌謡旋律になる— 一部の雅楽研究家の間では、そ

のような言説が久しく唱えられてきましたが、いまだ一般にはほとんど知られていません。笙・箏・琵琶の楽譜に秘められた大陸的な旋律とは、一体どのような音楽なのでしょう。そこで本講座ではその言説にもとづいて、藤原師長の箏譜『仁智要録』から実際に音をおこしてみたいと思います。こんにちの雅楽とはまったく異なる音楽の世界をご体感下さい。



12月15日でおん連続講座Eより（出典：2010年12月21日放送、NHK 京都『ニュース 610 京いちにち：ラブ☆ラボ研究室探訪』）

伝音セミナー
日本の希少音楽資源にふれる—SP 盤にきく幻の音
平成 22 (2010) 年度

日 時：2010 年 5 月～2011 年 3 月の全 8 回（原則として第 1 木曜日）

午後 2 時 30 分より 4 時 30 分

会 場：日本伝統音楽研究センター合同研究室 1

参加費：無料、定員：50 名

第 1 回 2010 年 5 月 6 日（木） SP レコードの作り方

講師：大西秀紀

明治 36 (1903) 年、英国グラモホンによる日本での出張録音以来、数万枚といわれる SP レコードが国内で録音・制作されました。しかし、録音技術について各社のガードは固かったため、録音現場の実態はあまり知られていません。セミナー第 1 回は、SP レコードの制作サイドに注目して、録音現場の実態に迫ります。

（広報資料より。以下同じ。）



第 2 回 2010 年 6 月 3 日（木） レーベルいろいろ

講師：大西秀紀

日本で最初のレコード会社、コロムビアミュージックエンタテインメントが、平成 22 (2010) 年に、創業 100 周年を迎えます。その歴史は、つまり、SP レコードが国内生産されて 100 年経つことを表しています。この間、さまざまなレコード会社が生まれては消えました。第 2 回は、その消えた会社の中から、特にオリент、ニットー、ツルといった関西・中京系の個性的なレーベルに注目し、皆様を地域性豊かな芸能の世界へと

御案内します。

第3回 2010年7月1日(木) 日本の仏教における声明の伝承と楽譜

講師：藤田隆則

日本の仏教寺院には、日頃よく耳にふれる読経のほかにも、讃、偈、伽陀など音楽的に高度な様式をそなえた声明が伝承されていますが、伝承を正確におこなうべく、様々なかたちの楽譜が工夫されてきました。このセミナーでは、日本を代表する仏教音楽の種目とその楽譜の大まかな読み方を、いくつかの歴史的音源とあわせて紹介しつつ、世界に誇る日本の無形伝承の豊かさのいったんを示したいと思います。

第4回 2010年9月2日(木) 「八島もの」を聴く

講師：竹内有一

源平の屋島(八島)の合戦にからめて作られた「八島もの」の作品群から、三味線音楽の音源を中心に聴きます。今秋開催予定の創立130周年記念行事「公開講座京の芸能に見る創造の可能性」の予習セミナーとします。

第5回 2010年10月7日(木) 浪曲のいろいろ

講師：後藤静夫

手軽な大衆芸能として、戦前戦後一世を風靡した感のある浪曲も、若者達のさまざまな音楽実践や、カラオケの流行等に押され、ほとんど消滅寸前の状態となりました。しかし説経節や祭文、チョンガレ節等の長く、根強い伝統を踏まえ、時々の流行・好みを柔軟に取り入れ、大衆が理解し共感しやすい価値観・倫理観を、わかりやすい詞章と変化に富んだ節付で展開する浪曲は、簡単に消え去ることはなく、じわじわと復活の兆しを見せています。関東節、関西節、中京節といった地域性も指摘され、その魅力は一声・二ふし・三啖呵(せりふ)とも云われます。今回は、幅広く奥深い浪曲の世界を、限られた時間と音源で聞いていただきます。

第6回 2010年12月2日(木) 山城少掾の長時間レコードを聴く

ゲスト：大西秀紀 講師：山田智恵子

長時間レコードとは、特殊な方式により録音された音盤で、再生が難しく、幻のレコードといわれてきたものです。山城少掾の義太夫節長時間レコードは、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館が復元再生し、CD化されています。今回その復元にあたった大西秀紀氏にお話を聞くとともに、この長時間レコードでしか聞けない山城少掾の「鎌倉三代記三浦恩愛の段」について、風(音楽様式)の観点から考えていきます。

第7回 2011年1月6日(木) 民謡・新民謡の録音を聴く**講師：齋藤 桂**

昭和初期の日本では、民謡が非常に注目されていました。そこには伝統的な民謡だけではなく、同時代の新民謡や、外国のものも含まれます。これらはポピュラー音楽として、また学術的な資料として、もしくは国策としてレコード化されました。つまり、生活・学問・政治など様々な場で民謡が重視されていたわけです。本セミナーでは、当時の音源を聴きながら、民謡、そしてそれが注目されたことの意義について考えていきます。

**第8回 2011年3月3日(木) 花街をどりのレコード****講師：大西秀紀**

花街をどりは春の京都の美しいイベントです。明治5年より続く都をどりや鴨川をどりはじめ、京おどりと北野をどりは、平成の今日でも変わらず人々の眼を楽しめています。今回は都をどりの歴史的録音を中心に、聴く花街をどりの世界へご案内します。

専任教員の活動報告

平成22(2010)年度

(旧年度の補遺を含む)

久保田 敏子

著作活動

- * 2010.04.01 ~ 2011.02.01 偶数月連載, 楽曲解説: 継橋検校「難波獅子」, 鶴山勾当「所縁の月」, 峰崎勾当「花の旅」, 松浦検校「末の契」, 菊原琴治「最中の月」, 鶴山勾当「正月」, 『楽報』都山流尺八楽会刊.
- * 2010.04.10 論考: 「地歌・箏曲の先師たち(12)~地歌の曲種と芸脈~」, 『三曲』NO. 99, 日本三曲協会会報.
- * 2010.05 ~ 2011.03 奇数隔月連載, 楽曲解説: 吉沢検校「千鳥の曲」, 石川高等「新青柳」, 継橋検校「難波獅子」, 芝居歌物「吼噓」, 峰崎勾当「ゆき」, 『創明』創明音楽会刊.
- * 2010.05.05 解説: 三橋検校「雪月花」, 菊原琴治「秋風辞」, 菊岡検校「楫枕」, 松浦検校「四季の眺」, 光崎検校「千代の鶯」, 芳沢琴七・若村籐二郎「石橋」, 『第101回琴友会箏曲地歌演奏会』プログラム, 国立文楽劇場.
- * 2010.05.09 随想: 「清翁先生3回忌追善・清琴先生重要無形文化財保持者記念演奏会によせて」, 同記念演奏会プログラム, 国立劇場.
- * 2010.05.16 論考: 『長谷検校と九州系地歌(9)』, 長谷検校記念第16回くま

もと全国邦楽コンクール・本丸御殿コンサート冊子.

- * 2010.06.01 随想: 「中島勝祐師を偲ぶ」, 『邦楽と舞踊-追悼東音中島勝祐-』2巻6号.
- * 2010.06.05 解説: 「澤千佐子と北新地芸妓による-浪花の廓の音いろいろ-峰崎勾当「越後獅子」, 上方唄「ぐち」, 芝居歌物「古道成寺」, 上方唄「堺住吉」, 上方唄「霧の雨」, 上方唄「嘘とまこと」, 上方唄「大阪の四季」. NHK大阪主催レクチャーコンサート. プログラム, 大阪歴史博物館講堂.
- * 2010.06.19 解説: 宮城道雄「満州調」, 「大和の春」, 長沢勝俊「飛騨によせる三つのバラード」, 岸野次郎三+宮城道雄「吼噓」, 大阪新音主催第38回『宮城道雄をしのぶ箏の夕べ』, いずみホール, プログラム.
- * 2010.08.24 解説: 二世清元齊兵衛「四季三葉草」, 二世清元梅吉「隅田川」, 二世清元齊兵衛「再茲歌舞伎花轆(お祭)」, 「八十八年の時空を越えて相い合う力」清元梅吉・清元延珠太夫との鼎談録, 『清元~清き流れひと元に~』芸の真髓シリーズ第4回, NHKエンタープライズ主催, 国立劇場, プログラム.
- * 2010.08.22 記事: 「日本の伝統と技を守る人々-重要無形文化財箏曲・米川

- 文字」重要無形文化財保持者編第36回『文化庁月報』通巻503号平成22年8月号。
- * 2010.09.07. 系譜作成:「九州系地歌箏曲. 福田栄香伝承系譜」web掲載用.
 - * 2010.09.14 論考:「地歌・箏曲の先師たち(13)～地歌箏曲の分類と芸脈～」、『三曲』NO.100, 日本三曲協会会報.
 - * 2010.09.25 論考:「音楽から見た灌頂会の声明」、『天台声明 投華得仏』国立劇場第46回声明公演冊子, 国立劇場.
 - * 2010.10.05 解説:三世萩岡松韻「偲ぶ草」「菊慈童」「月」「萩の花妻」「卒塔婆小町」「やれかかし」『萩岡松韻の世界—三世萩岡松韻の作品を聴く—』プログラム, 紀尾井ホール.
 - * 2010.10.10 解説:菊武祥庭「浜千鳥」「松の露」, 菊岡検校「芥子の花」「茶音頭」「楫枕」, 松浦検校「新浮舟」「里暁」, 石川勾当「八重衣」, 幾山検校「萩の露」, 光崎検校「七小町」「五段砧」, 菊末勾当「嵯峨の秋」, 峰崎勾当「残月」, 当道友楽会主催『祥門会第2回勉強会』, 国立文楽劇場小ホール.
 - * 2010.10.18 解説:岸野次郎三「放下僧」「里景色」「古道成寺」『第27回富成清女地歌箏曲演奏会』プログラム, 紀尾井ホール.
 - * 2010.10.24 解説:沢康雄作曲・青山政雄編曲「親鸞聖人和讃 恩徳讃」、宮城道雄「春の海」「遠砧」、小山清茂作曲「和楽器のための三重奏曲」、峰崎勾当「月」、松浦検校「里の暁」、『須山知行一周忌追善演奏会』大阪音楽大学後援プログラム, 国立文楽劇場.
 - * 2010.10.29 小論:「二つの聖霊会—法隆寺と四天王寺—」第44回雅楽公演会』プログラム, 雅亮会・朝日新聞社主催, 梅田芸術劇場メインホール.
 - * 2010.11.07 小論:「近世邦楽に生かされた本歌取の精神」, 『京の芸能に見る創造の可能性—見え隠れする本歌取りの精神—』京都市立芸術大学創立130周年記念・日本伝統音楽研究センター開設10周年記念公開講座, 講堂.
 - * 2010.12.01 解説:「《六段の調べ》と《クレド》」, 光崎検校「五段砧」, 「秋風の曲」(野坂操壽「合の手」補作), 三つ橋勾当「松竹梅」, 『第24回野坂操壽箏リサイタル—古典作品による—』プログラム, 渋谷文化総合センター大和田伝承ホール
 - * 2010.12.29 解説:松浦検校「四季の」, 八橋検校「雲井の曲」, 萩岡検校「笹の露」, 邦楽技能者オーディション合格者CD「地歌箏曲岡村慎太郎」日本伝統文化振興財団VZCF-1025.
 - * 2011.02.19 解説:1. まずは聞いて楽しもう。「千鳥の曲」2. 一緒に歌って楽しもう. 地歌「雷」「のみ」箏曲「手鞠」「ワンワンヤオニヤオ」3. 名曲鑑賞で楽しもう「夕顔」「水の変態」久保田敏子企画監修『地歌箏曲の楽しみ—ちょっとレトロな家庭音楽はいかがですか—』久保田敏子企画・構成による京都コンサートホールアンサンブルムラタ・コンサートシリーズのプログラム.
 - * 2011.03.06 小論:「序(箏組歌について)」, 解説:久村検校「友千鳥」, 北島検校「空蟬」「末の松」, 八橋検校「心尽」

「四季曲」「雲井弄齊」「薄衣」「扇曲」,
石塚検校「花の宴」, 三橋検校「玉鬘」,
『第十回箏曲組歌演奏会～流派を越えて
組歌の魅力を探る～』, 洗足学園音楽大
学現代邦楽研究所箏曲組歌会, 紀尾井
小ホール.

- * 2011.03.09 解説: 八橋検校「雪の晨」
深草検校「さらし」, 千代田検校「竹生
鳥」, 邦楽技能者オーディション合格者
CD「山田流箏曲萩岡未貴」日本伝統文
化振興財団 VZCF-1027.
- * 2011.03.23 論考: 「付説一《六段の調》
について」, CDアルバム『箏曲く六段>
とグレゴリオ聖歌くクレド>』VZCG-
743, 日本伝統文化振興財団.

口述活動

- * 2010.05.29 解説: 菊撫祥庭「稚児桜」「野
辺の錦」「浜千鳥」, 久本玄智「飛躍」,
牧野由多可「琉球民謡による組曲」, 藤
永検校移曲「八千代獅子」, 吉沢検校「春
の曲」, 菊岡検校「御山獅子」, 菊重精
峰「菊の詩」, 松浦検校「宇治巡り」「四
季の眺」, 八橋検校「六段の調」. なに
わ芸術祭『当道友楽会地歌箏曲記念演
奏会』, 国立文楽劇場.
- * 2010.06.19 澤千佐子と対談: 『浪花の
廓の音いろいろ』, 大阪歴史博物館講堂.
- * 2010.06. 講演: 「宮城道雄と須山知行
について」, 大阪新音主催第38回『宮
城道雄をしのぶ箏の夕べ～須山知行師
追惜演奏会～』いずみホール.
- * 2010.07.10 学会発表: 「箏曲《六段》
の成立にかんする試論」皆川達夫氏と
分担. 『日本音楽学会第340回定例研究
会』明治学院大学白金校舎アートホー
ル
- * 2010.10.02 司会・解説: 玉岡検校・
村住勾当「朝戸出」, 八百六伊八「ひな
ぶり」, 継橋検校「八重霞」, 菊原琴治「摘
草」, 千代見草」, 島野勘七・若村藤四
郎「雉子」, 峰崎勾当「小簾の外」「ゆき」,
松浦検校「末の契」「深夜の月」, 菊岡
検校「茶音頭」「夕顔」「長等の春」, 松
島検校「落し文」, 歌木検校「通ふ神」,
鶴岡勾当「所縁の月」, 藤尾勾当「虫の
音」, 在原勾当「狭筵」. 『第4回胡弓勉
強会』玉水記念感第ホール.
- * 2010.10.18 講演: 「いまはむかし・元
祿の今日の作曲家～岸野次郎三の世～」
岸野次郎三「放下僧」「里景色」「古道
成寺」, 『第27回富成清女地歌箏曲演奏
会』, 紀尾井ホール.
- * 2010.11.07 シンポジウム・パネリスト
『京の芸能に見る創造の可能性一見え隠
れする本歌取りの精神一』京都市立芸
術大学創立130周年記念・日本伝統音
楽研究センター開設10周年記念公開講
座, 講堂.
- * 2010.12.19 企画・進行・解説「胡弓
とは」, 胡弓本曲「鶴の巢籠」, 箏と胡
弓「千鳥の曲」, 三曲合奏「正月」「口切」,
ヴァイオリンと三味線「黒髪」, 全楽器
聞き比べ「八千代獅子」. 『胡弓×ヴァ
イオリンーくらべて聴く弦の世界一』
(継ぐこと・伝えること45) 京都芸術
センター大広間.
- * 2011.03.12 解説: 松島検校「椿尽」,
物「都十二月」, 菊崎検校「西行桜」,
鶴岡検校「東山」, 謡物「貴船」, 不詳「チ
シャの木」「川端柳」「海老」. 『おち椿

の会』えん主催，法然院本堂。

学内活動

評議員、大学整備・改革推進委員会、国際交流委員会、学術交流推進委員会、全学広報委員会、安全衛生委員会、日本学生支援機構奨学金返還免除者候補者選考委員会、入試委員会、京都市立芸術大学芸術教育振興協会委員会、創立130周年事業実行委員会等委員

社会活動

文化庁文化審議会文化財分科会第四部門専門委員会委員、同選定保存技術部会委員長、京都創生研究会「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）」分科会委員、京都コンサートホール企画運営委員、京都芸術センター評議員、奈良秋篠音楽堂伝統芸能企画運営委員、平成23年度国民文化祭京都市実行委員会顧問、NPO法人日本の音振興普及協会副理事長、社団法人日本尺八連盟理事・副会長、京都府古典芸能振興公演補助金審査委員会、京都市芸術文化特別奨励制度選考委員会、京都市芸術新人賞・功労賞選考委員会、財団法人ポーラ伝統文化振興財団ポーラ賞選考委員会等委員、財団法人日本伝統文化振興財団邦楽技能者オーディション選考委員、社団法人日本尺八連盟主催オーディションおよびコンクール審査員、熊本長谷検校記念全国邦楽コンクール審査員等

所属学会

社団法人東洋音楽学会、日本歌謡学会（評議員）、日本民俗音楽学会

後藤 静夫

著作活動

- * 2010・07・04 解説「山車文楽とからくり」、(知立市政40周年・文化会館開館10周年記念 山車文楽・からくり公演 パンフレット)、pp.3-4
- * 2010・11・07 「開催の趣旨」、『京の芸能に見る創造の可能性』（京都市立芸術大学創立130周年記念・日本伝統音楽研究センター開設10周年記念 平成22年度日本伝統音楽研究センター第2回公開講座 パンフレット）pp.4-5
- * 2010・11・11 論考「近松と文楽」（神戸女子大学古典芸能研究センター編）『近松再発見—華やぎと哀しみ』大阪和泉書院 pp.184-200
- * 2011・02・05 解説「謡の中の風景—謡曲八景」、『京観世の伝統—記録と記憶から聞こえるもの』（京都市立芸術大学創立130周年記念 平成22年度日本伝統音楽研究センター第3回公開講座 パンフレット）、pp.44-45
- * 2011・03・31 研究ノート「文楽・義太夫節の伝承・稽古を探る—その1 竹本伊達大夫」、『日本伝統音楽研究』（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要）第8号 pp.67-91

プロデュース活動

- * 2010・11・13 企画・監修「伝統演劇・文楽」三業の実演と解説・講義 京道造形芸術大学通信教育部 総合教育科目 国立文楽劇場

講演・口述・解説活動

- * 2010・05・16 解説出演「江戸時代のからくり文化～座敷からくりに見る日本のエンジニアの源流」講師（放送大学特別講義）NHK 放送大学
- * 2010・07・04 解説・司会「山車文楽とからくり」知立市政40周年・文化会館開館10周年記念 山車文楽・からくり公演 知立市文化会館 パティオ花しょうぶホール
- * 2010・09・17 解説出演「伝説の至芸・二世桐竹勘十郎」（『芸能花舞台』NHK教育TV）
- * 2011・01・19 解説「文楽ゆかりの地を訪ねる旅」国立劇場あぜくら会特別企画バスツアー
- * 2011・01・26 「尼崎一街・人・文化」尼崎琴優会、ホテルニューアルカイツク
- * 2011・01・28 基調講演並びにコメント「地域の文化資源を活かす」第3回市町村文化行政ネットワーク会議（愛知県）、刈谷市総合文化センター

講義・講座活動

- * 2010・07・16 「人形芝居とその広がり」札幌大学文化学科 北方フォーラム講師、札幌大学
- * 2010・08・28 「義太夫節の床本と演奏」文楽応援団研修会、国立文楽劇場
- * 2010・09・13 「文楽の世界」ラストホール教養大学講師、伊丹市生涯学習センターラストホール
- * 2010・11・13 「文楽の制作他」京都造形芸術大学通信教育部 総合教育科目講師 国立文楽劇場

- * 2011・01・12 「伝統芸能の世界（3）文楽入門」シニアシティカレッジ講師、大阪教育大学天王寺キャンパス
- * 2011・02・02 「文楽の奥深さを探る（1）」シニアシティカレッジ・アドバンス講師、大阪南 YMCA
- * 2011・03・30 「文楽の奥深さを探る（2）」シニアシティカレッジ・アドバンス講師、大阪南 YMCA

調査・取材活動

- * 2010・05・01～02 讃岐源之丞座他 伝統民俗芸能（香川県三豊市）調査
- * 2010・06・20 能勢人形浄瑠璃月間事業（能勢浄瑠璃シアター）調査
- * 2010・06・26～27 讃岐源之丞座他 伝統民俗芸能（香川県三豊市）調査
- * 2010・10・02～03 讃岐源之丞座他 伝統民俗芸能（香川県三豊市）調査
- * 2010・10・16 伊勢神宮 神嘗祭（伊勢）調査
- * 2010・10・17 神宮徴古館（伊勢）調査
- * 2011・01・30～31 讃岐源之丞座他 伝統民俗芸能（香川県三豊市）調査

学内活動

- * 評議員
- * 芸術教育振興協会評議員

対外活動

- * 京都大学地球環境学堂三才学林 運営懇話会委員
- * 三重県志摩市教育委員会 安乘人形芝居検討委員会委員
- * 京都和文華の会 理事 他

竹内 有一

著作活動

- * 2011.03.31 講演記録「邦楽・邦舞にみる復活・復曲」、『楽劇学』第18号、pp.59-66
- * 2010.07.03 解説「山蔭右京」「玉の井」『国立劇場上演資料集 535 身替座禪』、日本芸術文化振興会、35-36pp。(初出『歌舞伎登場人物事典』2006年、白水社)
- * 2010.05.15 曲目解説「地歌舞：緑の綱」「清元：北州」「三曲：残月」「清元舞踊：鳥さし」「箏曲：手事四綴」「長唄舞踊：竹生鳥」、「出演者素描」7名、第26回舞踊・邦楽公演『新進と花形による舞踊・邦楽鑑賞会』パンフレット、国立文楽劇場
- * 2010.07.01 構成・解説「研究と公開のトピックから」『京都市立芸術大学創立百三十周年記念 十年のあゆみ』、京都市立芸術大学、pp.33-34
- * 2010.08.31 解説「吉原と俄」、『松竹大歌舞伎 公文協西コース』パンフレット、松竹
- * 2010.10～11 問題・解答・解説「第1回常磐津検定」、(社)関西常磐津協会
- * 2010.11.07 編集『京の芸能に見る創造の可能性一見え隠れする本歌取りの精神一』パンフレット、日本伝統音楽研究センター平成22年度第2回公開講座(京都市立芸術大学講堂)、36pp
- * 2010.11.07 解説「「八島もの」の見どころ聴きどころ」「八島もののエピソードと構成」、同上パンフレット、pp.17-

19

- * 2010.12.15 解説「常磐津節について」「子宝三番叟」「戻橋」、『常磐津節はおもしろい 伝統音楽の魅力を探る・レクチャーコンサート vol.6』パンフレット、京都和文華の会(京都府立文化芸術会館)、pp.4-9

口述活動

- * 2010.07.18 講演「邦楽・邦舞にみる復活・復曲」、第18回楽劇学会大会「楽劇の復活と復曲」、国立能楽堂
- * 2010.07.24 コメンテーター(寺田真由美「《五段返し》の音楽的成り立ち」に関して)、プロジェクト研究「音楽・芸能史における芸術化の諸問題」、日本伝統音楽研究センター
- * 2010.09.02 構成・解説「「八島もの」を聴く」、平成22年度第4回伝音セミナー、日本伝統音楽研究センター
- * 2010.11.07 企画・制作「京の芸能に見る創造の可能性一見え隠れする本歌取りの精神一」、日本伝統音楽研究センター平成22年度第2回公開講座、京都市立芸術大学講堂
- * 2010.11.14 司会「研究発表3」(A会場、4件)、(社)東洋音楽学会第61回大会、東京学芸大学
- * 2010.12.15 企画・構成「常磐津節はおもしろい 伝統音楽の魅力を探る・レクチャーコンサート vol.6」、京都和文華の会、京都府立文化芸術会館
- * 2010.12.15 解説「常磐津節について」「子宝三番叟」「戻橋」、同上
- * 2010.12.15 鼎談「常磐津節の伝承と魅力」(常磐津一巴大夫・権藤芳一)、

同上

〈講義・教育〉

- * 音楽学特講 h (前期 4 回)、京都市立芸術大学音楽学部
- * 音楽学 1 (後期 15 回)、京都市立芸術大学美術学部
- * 京都文化学基礎演習 I (前期 15 回)、京都府立大学
- * 京都文化学基礎演習 II (後期 15 回)、京都府立大学
- * (2009 年度補遺) 2009.04.08 ~ 07.22 でんおん連続講座 A 「近世のうた本・浄瑠璃本の出版事情—三味線音楽に親しむために—」(全 8 回)、キャンパスプラザ京都

〈共同研究〉

- * 共同研究「歌舞伎の地方—伝承と演出、歴史と現在—」研究代表者、日本伝統音楽研究センター(詳細別掲)
- * プロジェクト研究 2 件・共同研究 1 件、共同研究員、日本伝統音楽研究センター(詳細別掲)
- * 共同研究「民謡研究の新しい方向」共同研究員、国際日本文化研究センター(研究代表者: 細川周平)

調査・取材活動

- * 常磐津節の伝承実態に関わる調査(科学研究費補助金研究課題番号 225201445 「豊後系浄瑠璃の伝承実態」)
- * 詞章本出版物(浄瑠璃本・うた本)等の書誌調査およびデータ作成
- * 近世邦楽関連の近世版本の市場調査およびその収集・保存・公開に関わる調査
- * 歌舞伎・文楽・邦楽・日本舞踊等の公演・

稽古における演奏手法や伝承状況等の調査

- * 京都の花街における音楽伝承の実態調査

演奏活動

- * 2010.05 常磐津節「京人形」の浄瑠璃演奏、『團菊祭五月大歌舞伎』大阪松竹座
- * 2010.06.19 常磐津節「積恋雪関扉(上)」の浄瑠璃演奏、NHK-FM「邦楽百番」
- * 2010.07.08 常磐津節「朝顔市」「夕涼み三人生酔」の浄瑠璃演奏、NHK-FM「邦楽のひととき」
- * 2010.09.11 常磐津節「弓八島」の浄瑠璃演奏(2010.07「演劇人祭」国立劇場)、NHK-BShi「プレミアムシアター」
- * 2011.01 常磐津節「廓文章」の浄瑠璃演奏、『寿初春大歌舞伎』大阪松竹座
- * 随時 講義・講演等における浄瑠璃(常磐津節)の実演デモンストレーション

委員・役職等

- * 第 65 回文化庁芸術祭執行委員会審査委員(音楽部門、関西の部)
- * 文化庁国際芸術交流支援事業協力者会議審査委員(伝統芸能部門)
- * (社)東洋音楽学会 理事(総務、西日本支部経理)、情報委員長

〈学内〉

- * 京都市立芸術大学整備・改革推進委員会施設整備部会員
- * 広報委員会委員、同電子・印刷メディア小委員会委員
- * 情報管理委員会委員、同ネットワーク管理運営部会委員、同情報スペース運営部会委員

所属学会等

(社) 東洋音楽学会、楽劇学会、近世文学学会、藝能史研究会、歌舞伎学会、国際浮世絵学会、洋学史研究会、長野郷土史研究会、関西木造劇場研究会、常磐津協会

藤田 隆則

著作活動

- * 2010.03 単著論文「同音という指標—中世芸能のウタイとコトバ」『口承文芸研究』33号、pp.140-145
- * 2010.05 単著小エッセイ「古典芸能／民俗芸能における退屈」川田順造編『響き合う異次元—音・図像・身体』平凡社、pp.251-252
- * 2010.06.26 恵阪悟との共編『山口鷺流狂言—地域伝承の可能性』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催平成22年度第1回公開講座、当日配布パンフレット、32pp（このうち単著小エッセイ（インタビュー編集）「地域伝承の可能性—山口鷺流保存会にきく」（pp.28-32）を執筆）
- * 2010.11.07 単著小エッセイ「平家琵琶から能の〈八島〉へ」竹内有一・南里実共編『京の芸能に見る創造の可能性—見え隠れする本歌取りの精神』（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催平成22年度第2回公開講座、当日配布パンフレット）pp.20-21
- * 2011.01 研究報告レポート（題名なし、小日向英俊、内堀明子、藪田郁氏の研究発表報告記事）、『東洋音楽学会会報』第81号、p4
- * 2011.02 恵阪悟との共編『京観世の伝統—記録と記憶から聞こえるもの』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催第30回（平成22年度第3回）公開講座（および展覧）、当日頒布パンフレット、2011年2月5～13日、60pp（このうち単著エッセイとして「開催の趣旨」「修養としての謡—儀礼、思想、身体」「謡の響く場所と場面」「謡講」「『京観世をたずねて』—素人の素謡」「京観世の技法」、共著エッセイとして「謡の功德—謡の十五徳」（小泉美郷と共同執筆）
- * 2011.03.31 単著エッセイ「幸若舞「敦盛」復元の場所に立ち会って」『楽劇学』18号、pp.93-98

口述活動

- * 2010.02.27 報告「謡伝書の具体的理解と体系的把握へ向けた基礎作業」演劇映像学連携研究拠点研究報告会、東京：早稲田大学演劇博物館
- * 2010.05-07（毎週水曜日、全10回）講義「でんおん連続講座B 謡を朗読する—能をたのしく鑑賞するための準備」22年度前期 京都市：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
- * 2010.06.26 総合司会「山口鷺流狂言—地域伝承の可能性」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催平成22年度第1回公開講座、京都市：大江能楽堂
- * 2010.07.01 音源内容解説「日本の仏教における声明の伝承と楽譜」（京都市

立芸術大学日本伝統音楽研究センター
伝音セミナー第3回) 京都市:京都市
立芸術大学

* 2010.07.25 講演「声を出して読み、
唱え、歌うことの効用」本願寺日曜講演、
京都市:本願寺聞法会館

* 2010.08.04 講演「仏教(とくに真宗)
文化の中の音楽と音声」龍谷総合学園
第44回宗教教育研究会、京都:京都市
立芸術大学日本伝統音楽研究センター

* 2010.10-12 (毎週水曜日、全10回)講
義「でんおん連続講座C 謡を朗読す
る一能をたのしく鑑賞するための準備」
22年度後期 京都市:京都市立芸術大
学日本伝統音楽研究センター

* 2010.10.01 高等学校研究授業へのコ
メント(題名なし)、滋賀県:近江兄弟
社高等学校

* 2010.10.16-17 小講演「日本における
音楽文化、その伝統の継承について」
音楽学部オープンスクール 京都市:
京都市立芸術大学

* 2010.10.29 導入の小講演「八島・修
羅能・複式夢幻能・能楽・平家物語」
中村典子企画「国際交流の集い—異文
化間創造・韓国伝統舞踊と平家物語の
はざまから」、京都市:京都市立芸術大
学日本伝統音楽研究センター

* 2010.11.05 公開授業へのコメント「日
本伝統音楽の特徴」第52回近畿音楽教
育研究大会、滋賀県:近江兄弟社高等
学校

* 2010.11.07 シンポジウムでの発表「平
家琵琶から能の〈八島〉へ」京都市立
芸術大学日本伝統音楽研究センター主

催平成22年度第2回公開講座、京都市:
京都市立芸術大学講堂

* 2010.11.16 小学生への授業「日本の伝
統音楽—能の音楽と囃子」亀岡市立東
小学校6年生研修授業、京都市:京都
市立芸術大学日本伝統音楽研究センタ
ー

* 2010.12.18 研究発表「能のノリ、地
拍子、音数律」歴史的認知音楽学研究会、
奈良:奈良女子大学

* 2011.01.22 特別授業「能の謡のおもし
ろさ—韻文による演劇」京都工芸繊維
大学授業「京の文化財学」でのゲスト
講師)、京都市:京都工芸繊維大学

* 2011.02.05/06/09/10 司会「京観世の伝
統一記録と記憶から聞こえるもの」京
都市立芸術大学日本伝統音楽研究セン
ター主催第30回(平成22年度第3回)
公開講座、京都市:京都市立芸術大学
堀川御池ギャラリー

* 2011.02.07-08 ワークショップ担当「京
観世の録音を聞く(その1、その2)」
京都市立芸術大学日本伝統音楽研究セ
ンター主催第30回(平成22年度第3回)
公開講座、京都市:京都市立芸術大学
堀川御池ギャラリー

* 2011.02.14 講演「能楽がつくる時間と
空間」大阪市現代芸術創造支援事業上
方西洋古楽演奏会シリーズ「和洋の再
会」、大阪市:大阪九阜会館

* 2011.03.22/24 講演(英語による、中
国語通訳付)「日本佛教音乐乐谱的诸像
(Transmission of Japanese Buddhist Chant
and its Notation)」音楽学論壇、中国:
上海音乐学院(22日)、武漢音乐学院(24

日)

- * 2011.03.23/25 講演（日本語による、中国語通訳付）「以故事的叙事方法为视角对日本戏剧（能、文乐、歌舞伎）的分析比较研究（能、文楽、歌舞伎を物語の語り方という観点から比較する）」音楽学論壇、中国：武漢音楽学院（23日）、上海音楽学院（25日）

- * 2011.03.28 ワークショップ（日本語による、中国語通訳付）「能の舞の構造をなぞる」大学院対象授業、中国：上海音楽学院

プロデュース活動

- * 2010.06.26 「京都市立芸術大学創立130周年記念 山口鷺流狂言一地域伝承の可能性」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催平成22年度第1回公開講座（能楽学会第15回能楽フォーラムとの共催）、京都市：大江能楽堂
- * 2011.02.05-13 「京都市立芸術大学創立130周年記念 京観世の伝統一記録と記憶から聞こえるもの」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催第30回（平成22年度第3回）公開講座（および展覧）

調査・取材活動

- * 継続中 謡曲・能の囃子の伝承にかかわる調査

学内活動

- * 京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師（2010.04-2011.03）
- * 附属図書館・芸術資料館運営委員会委員
- * 京都市立芸術大学整備・改革推進委員

会目標部会委員

- * 京都市立芸術大学整備・改革推進委員会目標評価ワーキンググループメンバー

対外活動

- * 本願寺教学伝道研究センター委嘱研究員
- * 東洋音楽学会理事（機関誌編集事務局担当）
- * 早稲田大学演劇博物館客員研究員
- * 神戸女学院大学音楽学部非常勤講師（2010.09-2011.03）
- * 滋賀大学教育学部非常勤講師（2010.04-2010.09）

*所属学会

日本音楽学会、楽劇学会、東洋音楽学会、能楽学会、音楽教育学会、芸能史研究会、International Council for Traditional Music、Society for Ethnomusicology

山田 智恵子

著作活動

- * 2010.06.10 随想「鼯鼠のひきおこ私（25）清元延柳」、『上方芸能176号』p.62
- * 2010.06.30 でんおんエッセイ「町田佳聲のこと」『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所報 第11号』pp.21-22
- * 2010.07.03 論考「義太夫節の魅力」国立劇場第151回邦楽公演パンフレット『音曲の司 義太夫節の魅力』pp.2-4
- * 2010.07.03 解説「演目解説 義経千

本桜河連法眼館の段」国立劇場第151
回邦楽公演パンフレット『音曲の司
義太夫節』p.5

口述活動

- * 2010.05.23 研究報告「豊後系浄瑠璃
譜例の版比較検討結果 新内節・宮蘭
節」平成22年度共同研究「町田佳聲の
三味線音楽研究」第1回共同研究会、
日本伝統音楽研究センター
- * 2010.11.06 研究報告「町田解説義太夫
節尽しレコードの紹介」平成22年度共
同研究「町田佳聲の三味線音楽研究」
第3回共同研究会、日本伝統音楽研究
センター
- * 2010.12.06 構成・解説「山城少掾の
長時間レコードをきく」平成22年度第
6回伝音セミナー、日本伝統音楽研究
センター

調査・取材活動

- * 継続中 町田佳聲の三味線音楽研究に
ついての調査
- * 2011.03.24-25 日本民謡協会において

町田佳聲の遺品調査

- * 継続中 義太夫節の音楽様式の伝承に
関する調査

学内活動

- * キャンパス・ハラスメント防止対策委
員会委員、京都市立芸術大学創立
百三十周年記念『十年のあゆみ』(2010
年7月1日発行)編集委員会委員、十
年略史編集委員会委員、サテライト運
営委員会委員
- * 京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師「日
本音楽史Ⅰ」「日本音楽史Ⅱ」(2010.04-
2011.03)「音楽学特講h(前期5回)」(藤
田、竹内との分担講義)

学外活動

- * 独立行政法人日本芸術文化振興会第23
期文楽研修講師
- * 東洋音楽学会機関誌編集委員(2010.09
まで)
- * 所属学会：日本音楽学会、社団法人東
洋音楽学会、楽劇学会、
- * 清元協会会員

彙報

平成 22 (2010) 年度

人事 採用と異動

- ◇平成 22 年 4 月 1 日
 非常勤講師 大西秀紀 (新規採用)
 非常勤講師 齋藤 桂 (新規採用)
 非常勤講師 田鍬智志 (新規採用)
- ◇平成 23 年 3 月 31 日
 非常勤講師 齋藤 桂 (任期満了)

出版物

『日本伝統音楽研究』第 8 号
 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究紀要
 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2011 年 3 月 31 日、B5
 2 段縦組・1 段横組 126pp.

〈論文〉

* 加納マリ「初期の胡弓について—17 世紀の文字資料と図像資料から—」

〈研究ノート〉

* 奥中康人「モニュメントとしての行進曲から地域のお囃子へ—山国陸軍隊の伝播と変容—」

* 寺田真由美「俗曲《五段返し》にみる地域性と時代性—大正期の京阪神における再流行—」

〈資料〉

* 後藤静夫「文楽・義太夫節の伝承・稽

古を探る その 1 竹本伊達大夫」

〈記録〉

* 皆川達夫・久保田敏子「箏曲《六段》の成立に関する一試論」(日本伝統音楽とキリシタン音楽との出会い—洋楽渡来考再論第 3—、付説《六段の調》解題)



図録『SP レコードレーベルに見る日蓄—日本コロムビアの歴史』

大西秀紀編、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、2011 年 3 月 31 日、A4 横組 60pp.

〈おもな内容〉

- * 創立前—日米蓄音機製造 (株) 時代
- * (株) 日本蓄音器商会—ワシ印の時代
- * ワシから二連音符へ—戦前コロムビア・

ニッチク時代

- * SPレコード時代の終焉と新しいメディアの出現
- * 明治—大正—昭和（戦前）のレコード袋（スリーブ）の例
- * 掲載資料一覧



『日本伝統音楽研究センター 所報』

第11号、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2010年6月30日、A5横組 66pp.

デジタルアーカイブズ

(web コンテンツ)

伝音アーカイブズ

2010年度までに公開したコンテンツと編著者は以下の通り。

- * 音楽文化新聞 記事索引（上野正章）
- * 祇園囃子アーカイブズ（田井竜一）
- * 桂地蔵前六斎念仏—その特質と伝承をめぐって—（田井竜一）
- * 画像資料にきく「祇園囃子」（田井竜一）
- * 「正本を読む会」報告（竹内有一）
- * 箏曲・地歌の歌本（竹内有一）
- * 現代邦楽放送年表（長廣比登志）
- * 能の地拍子研究文獻目録—単行本の部—（藤田隆則）
- * 『観世』目次一覧（昭和5年9月—昭和19年3月）（藤田隆則）
- * 謡伝書の具体的理解と体系的把握へ向けた基礎作業（藤田隆則）
- * 日本伝統音楽研究の真髄に触れる—ゲストと所長による対談集—

以上のほか、収蔵資料検索データベース、SP音源試聴コーナーなどのデジタルアーカイブズを公開し、随時更新を行っている。詳細はwebサイトをご覧ください。

展 観

(1) 雅楽の楽器

期間：2009年9月～2010年6月

構成：山田智恵子・齊藤尚

内容：雅楽で使用される楽器を、詳しい解説とともに展示。

国際交流

(2) SPレコードレーベルに見る 日蓄一

日本コロムビアの歴史

期間：2010年7月～

構成：大西秀紀

内容：今年（2010年）コロムビアミュージックエンタテインメント（株）は創立100周年を迎えます。その前身である（株）日本蓄音器商会在明治43（1910）年10月1日に創立されて以来、同社は常に日本のレコード業界を牽引してきました。今回の企画展示は、同社のSPレコード時代の、主に邦楽レコードのレーベル意匠の変遷をたどりながら、その歴史を振り返ります。（web広報文より）

（研究および展覧の成果を2011年3月に図録として出版）

委託研究

当センターに所蔵される江戸期の古文書を画像データベースとして公開する準備を進めるため、また、古文献に関する共同研究活動の一環として、立命館大学文学部 赤間亮教授の協力により、同大学アトリサーチセンター修復部主任 中村智子氏に、以下の業務を委託した。

◇中村智子「日本伝統音楽研究センター所蔵 江戸期の古文書Ⅰ類の画像データ化」

（学術委員会：竹内有一）

(1) 国際交流の集い1

マダガスカル伝統楽器〈ヴァリハ（竹筒琴）〉と〈箏・尺八〉の出会い

国際交流基金から「マダガスカルから招聘中の〈ヴァリハ（竹筒琴）〉奏者 アンジアナリマナナ氏（Mr. Jean-Baptiste ANDRIANARIMANANA）の演奏披露と日本の〈箏〉及び〈尺八〉との比較の場を設定できないか」との要請を受けて、下記のような〈国際交流の集い〉の無料公開講座（ミニ・レクチャーコンサート）を開催した。

日時：2010年8月3日 午前10時15分～12時15分

場所：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター7階合同研究室1

入場：無料。申込不要。

内容：1. ヴァリハの紹介と演奏：アンジアナリマナナ氏（フランス語。日本語通訳付）

2. 尺八の紹介と演奏：古伝〈鶴の巢籠〉
國見政之輔氏

3. 箏の紹介と演奏：宮城道雄作曲〈ロンドンの夜の雨〉 西川かをり氏

4. 箏と尺八の演奏：宮城道雄作曲〈春の海〉 西川かをり氏＋國見政之輔氏

5. 現代の箏曲：沢井忠夫作曲〈鳥のように〉 林美音子氏

6. ヴァリハの演奏

7. 質疑応答

企画・構成・解説：久保田敏子



(2) 国際交流の集い2

異文化間創造—韓国伝統舞踊と平家物語 のはざまから—

音楽学部の中村典子講師からの要請を受けて、東アジアの伝統音楽・文学を基に異文化間創造を通して日韓を行来し、舞踊創作を続けている李周熙氏（韓国中央大学校舞踊科教授）による研究集会を、音楽学部と日本伝統音楽研究センターとの共同企画にて開催した。

日 時：2010年10月29日 午前10時
40分～12時10分

場 所：京都市立芸術大学日本伝統音楽
研究センター7階合同研究室1

入 場：無料。申込不要。

内 容：1. 導入：八島—修羅能—複式夢
幻能—能楽—平家物語 藤田隆則准教授

2. 講演：異文化間創造—舞踊創作（平
家幻想）をもとに 李周熙教授

3. 質疑応答

（久保田敏子）

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 概要 2010

設立の理念

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指し、2000年に設立されました。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に受け継いできている日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものであり、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を研究し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。そのために国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

主な活動内容

◆資料の収集・整理・保存

* 文献資料（図書、逐次刊行物、古文獻、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む）

* 音響映像資料

* 楽器資料

* 絵画資料

* データーベースなどの電子資料

◆日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究

* 専任教員による個人研究

* 非常勤講師（特別研究員）による特定のテーマの研究

* 外部の研究者に、その専門領域に即したテーマで委託する研究（「委託研究」）

◆日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究

* 国内外の多くの研究者・演奏家の参加・協力を得て、学際的・国際的な視野で、センターが行う共同研究活動（「プロジェクト研究」「共同研究」）

* センターが外部と共同して行う調査研究

◆活動成果の社会への提供

* 市民向け公開講座・セミナー等の開催

* 紀要・所報・資料集成などの学術出版物の発行

* 電子メディアによる情報発信

研究の視点と領域

◆伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみすえる

*明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承

<古代> 祭祀歌謡と芸能（楽器等の考古学的遺物を含む）

<上代・中古> 仏教音楽（声明等）宮廷の儀礼・宴遊音楽（雅楽等）

<中世> 仏教芸能（琵琶、雑芸、尺八等）武家社会の芸能（能・狂言等）流行歌謡（今様、中世小歌等）

<近世> 外来音楽（切支丹音楽、琴楽、明清楽）劇場音楽（義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等）非劇場音楽（地歌箏曲、三味線音楽、琵琶楽、尺八等）流行歌謡（小唄、端唄等）

◆近代社会での伝統音楽の展開をみすえる

*伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究

*伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究

◆広い視野で生活の音楽をみすえる

*民間伝承と日本関連諸地域及び先住民の音楽・芸能の研究

*生活における音楽・芸能（わらべうた・民謡、祭礼音楽等の民俗芸能）の研究

スタッフ

◆専任教員

所長：久保田敏子（音楽学、日本音楽史学）
「三味線音楽の変遷と楽曲研究」

教授：後藤静夫（日本芸能史）

「人形浄瑠璃文楽の実態」「近世語り物の伝承形態」「座敷カラクリ復元の諸相」
教授：山田智恵子（音楽学）

「義太夫節の音楽学的研究」「三味線音楽の通ジャンルの音楽様式研究」

准教授：田井竜一（民族音楽学・日本音楽芸論）

「山・鉾・屋台の囃子の比較研究」「六斎念仏の研究」

准教授：竹内有一（日本音楽史学）

「豊後系浄瑠璃の伝承実態」「関西における江戸音曲の伝承」「近世・近代の京都と音楽文化の諸相史」

准教授：藤田隆則（民族音楽学）

「中世の歌と語りの作曲法」「能・狂言の演出史」「古典／儀礼音楽の伝承形式研究」

◆非常勤講師

大西秀紀（特別研究員）

齋藤桂（特別研究員）

田歙智志（特別研究員）

東正子（情報管理員）

◆非常勤嘱託員

齊藤尚（学芸員）

高久直子（司書）

沿革

平成3年6月 世界文化自由都市推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を訴える。

平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設についても研究する」と言及。

平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教

育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される。

平成 8 年 12 月 京都市の「もっと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる。

平成 9 年 4 月 実施設計費及び地質調査経費 予算措置

平成 10 年 4 月 施設建設費 予算措置

平成 10 年 10 月 施設建設着工（工期 17 ヶ月）

平成 11 年 9 月 日本伝統音楽研究センター 設立準備室を設置する（室長：廣瀬量平名誉教授）。

平成 12 年 2 月 新研究棟竣工

平成 12 年 4 月 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター開設

廣瀬量平名誉教授が初代所長に就任

平成 12 年 12 月 京都市立芸術大学新研究棟完成披露式挙行

平成 16 年 4 月 吉川周平前教授が第二代所長に就任

平成 20 年 4 月 久保田敏子前教授が第三代所長に就任

施設

新研究棟 6～8 階（総面積 約 1,500 m²）

6 階 センター所長室、資料室、資料管理室、閲覧室、個人研究室

7 階 合同研究室 2、楽器庫、貴重資料庫

8 階 個人研究室 5、研究員室 2、視聴覚編集室、研修室 2

編集後記

3月11日に発生した東日本大震災で被災された方々には、御見舞申し上げます。

私は、当センターの研究紀要『日本伝統音楽研究』第8号（2011年3月31日発行）の編集後記に、次のように記しました。

「研究成果や研究資料は、いにしへの文化財と同様に、いかなる天変地異や災いが生じようとも、百年後・千年後に継承されなければなりません。」

このように記したのは、実は、震災よりひと月も前のことでした（初校を戻した前日の2月7日）。もちろん、私には予知能力はありませんが、千年に一度という規模の地震と津波を目の当たりにすると、私どものような領域の研究者は、いかに無力であるかを痛感いたします。

今回の震災に匹敵する規模とされる「貞観地震・津波」は、平安前期の貞観11年（869）5月に生じました。その被災状況を伝える史料として、藤原時平・菅原道真らが編纂した史書『日本三代実録』（901年）が理系の地震学者に注目されました。当センターでは2004年に、この史書に基づいた音楽年表（『日本伝統音楽資料集成4』）を出版しています。この資料集成の同年記事を見ると、陸奥国など諸国に災害が頻繁したので、伊勢大神宮に奉幣したり、金剛般若経を輪読させた、という記事が抜粋されています。まさに国を挙げて神仏にすがったのでしょうか。こうした古記録の存在意義や、社会の動向と音楽・芸能との関連深さを、再考してみたいと思います。

2012年度に、京都市立芸術大学は、公立大学法人となる予定です。小規模な大学ですので、多くの教職員がその準備に携わって奔走しています。震災による甚大な被害や復興に向けた数々の困難と比較することはできませんが、大学の歴史を塗り替える大きな節目となります。私には予言能力もありませんが、次のように締めくくりたいと思います。

「法人化後の京都芸大とセンターは、未来に向けて、ますます重要な存在として発展していきます！」

学術委員会 竹内有一

京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター 所報 第12号

2011年6月30日発行

編集

京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター
発行者

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町 13-6

E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp

<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

印刷所 株式会社 田中プリント

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts

13-6 Ooe Kutsukake-choo, Nishikyoo-ku

Kyoto-shi, 610-1197, Japan

E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp

<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

